

## 第4章 台風と艦隊

### 4.1 艦首切断（第4艦隊事件）

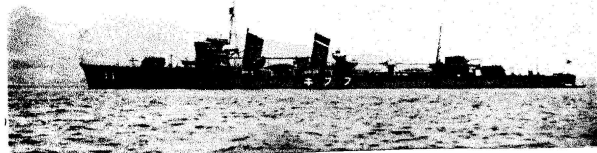
昭和10年9月27日海軍省発表「昨26日午後本州東方海面を通過せる異常な颱風に遭遇したる第四艦隊は、最大風速35米秒の荒天を冒して演習に従事中、激浪により駆逐艦初雪、夕霧は船体に相当大なる損害を被り、(中略)乗組将士に多数の犠牲者を出したるは洵に痛惜の至りに堪えず。行衛不明者に対しては目下極力搜索中にして・・・(後略)」。

1935年(昭和10)9月に起きた第4艦隊事件は平時の演習中の大海難として国民の驚きも大きかったが、特型駆逐艦の脆弱性が顕著となった海軍の衝撃は甚大であった。

#### 特型駆逐艦

ロンドン条約によって制限された補助艦艇の保有量を質で補う為に、日本海軍は斬新な駆逐艦の設計に成功し、1928年(昭和3)より25隻を次々と就役させた。従来艦に較べて船型の肥大化を極力抑えつつ(排水量1,700T)武装重量を7割増して37ktの速力を達成した。その為に溶接工法の採用や一部に軽合金を使用した。

特型駆逐艦の名称で後年の太平洋戦争では日本海軍駆逐艦の主力を占めた。



(第62図) 特型駆逐艦

#### 第4艦隊台風突入

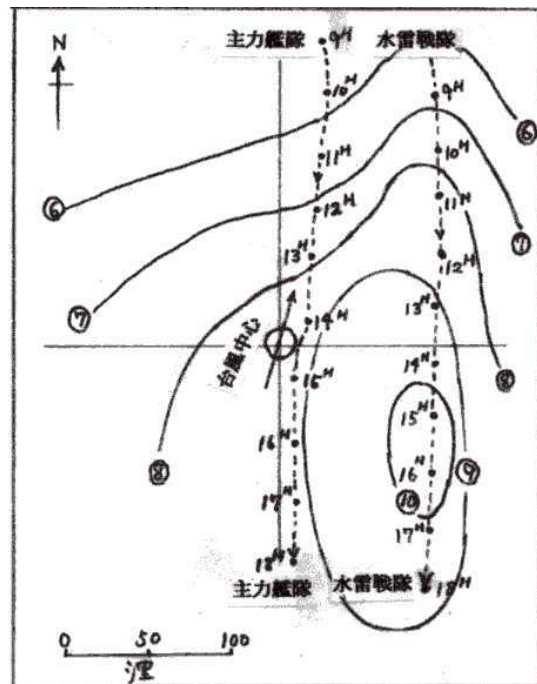
昭和10年度の海軍大演習は第1及び第2艦隊より成る常備連合艦隊(青軍)と、臨時に編成された第4艦隊(赤軍)の対抗戦として行われた。第4艦隊は旗艦の重巡“足柄”以下重巡3隻、軽巡3隻、軽空母2隻、補給隊と水雷戦隊(多数の駆逐艦)で編成された。

9月下旬、第4艦隊(赤軍)は函館湾を発して津軽海峡を東進して太平洋に出て南下し、北上する連合艦隊(青軍)と三陸沖で遭遇して艦隊決戦を行う予定であった。

この頃、台風2号は関東地方に大被害を与えつつ急速に北上中であつた。9月26日の午前3時頃、台風中心付近を航行中の商船“小倉丸”より「ワレ台風中心二近ツキツアリ。南東ノ風、風速29米、ナイシ35米、気圧732.5ミリナリ。」(957mb)との気象通報を受信した。

第4艦隊司令部は台風の前面を横切って青軍の方向に進撃可能と判断し、針路を変更せずに進んだ。台風遭遇するのにも得難い訓練との意識もあつた。

台風は予想外の時速80kmの猛速度で北上した為、第4艦隊は台風突入し、特に東側を航行した水雷戦隊は最も風波の激しい台風の危険半円しかも第4象限(註7、8)に入ってしまった、大被害を受けた。



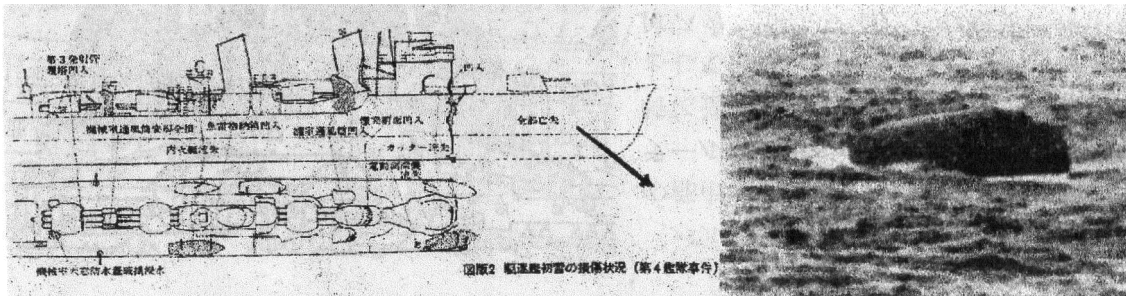
(第63図) 台風と艦隊の相対位置

## 駆逐艦“初雪”“夕霧”艦首切断

午後3時頃になると艦隊は台風の中心に達し、風速50m/秒、波は波高25~30m、波長250mを観測した。主力艦隊の軽巡洋艦“最上”軽空母“鳳翔”“龍驤”等の大型艦も大被害を被ったが、東側の航路の水雷戦隊の被害は甚大で、多数の駆逐艦が被害を受けた。中でも特型駆逐艦“初雪”と“夕霧”は午後5時30分頃に、ピラミッド状の大きな三角波に繰返し襲われて艦首が千切れる大事故となった。三陸東方約250浬の位置であった。

両艦とも防水措置及び砲弾や魚雷の投棄による復元力保持等により沈没は免れたが、問題は切断流失した艦首部分であった。両艦の艦首部分の50名程度の乗組員の安否も気掛かりだが、更に機密暗号書類がアメリカやソ連等の仮想敵国に押収される恐れがあった。嵐が収まった翌朝から全艦隊を挙げて捜索し、軽巡“那珂”が“初雪”の艦首部分を発見したが、生存者の見込みも絶望視され曳航も不可能で、機密書類の流失を防ぐ為に砲撃して撃沈した。“夕霧”の艦首部分は遂に発見されなかった。

第4艦隊は54名の犠牲者を出し、演習の一部を縮小続行した後に大湊軍港へ帰投した。



(第64図) “初雪”損傷状況と漂流艦首 (堀元美「駆逐艦」より転載)

## 事故原因の究明と影響

就航後7年も経つ日本海軍の誇る特型駆逐艦だが、従来より荒天に遭遇して艦首部分に皺が寄る現象が把握されていた。今回の第4艦隊の事故で海軍は査問委員会を発足させて、原因の究明に当たらせた。

今回の演習中に波長100m~150m、波高10m~15m、即ち波長・波高比(波長/波高)が10程度の尖った波が多く観測された。従来の強度設計基準では波長・波高比は20で、且つ波長は艦の長さと同等としていた。波長・波高比10で再計算すると、前部甲板の応力(使用鋼材の単位面積あたりに負荷される力)は69%増加する事が判明した。また強風下に於ける艦艇の復原性能も問題でトップ・ヘビーの解消が必要であった。

他国の海軍の設計基準も日本海軍と同様に、波長・波高比20であったが、日本海軍の予想作戦海域は、台風の通過や冬季の低気圧で三角波が頻発し易い西太平洋である為、問題は重要視された。海軍は他の艦種も含めて設計を再検討し、昭和10年から翌11年にかけて極秘裏に各海軍工廠や民間造船所に割り付けて、多くの艦艇の改修工事を施工した。

第4艦隊事件に関連して日本海軍は太平洋の波に就いての貴重なデータを得た事になるが、その反面、特型駆逐艦の重量軽減の為に多用していた電気溶接構造の強度が疑問視され、爾来、艦艇の重要部分の構造は鉚(リベット)工法に戻す事となり、昭和10年当時に建造中であった中型空母“飛龍”や重巡“筑摩”等も鉚構造に戻された。海軍部内では溶接反対派の平賀讓技術中将の声が大きかったが、溶接推進派との間の論争もあった。

結果として、太平洋戦争前から戦中にかけて、電気溶接工法を飛躍的に発展させ実用化したアメリカ海軍に技術的な遅れをとる事となった。

## 4.2 台風とアメリカ艦隊の大失態

毎年台風が来襲する日本では台風の研究は進んでおり、気象観測や通報のシステムも当時としては一流であった。更に日本海軍は前述の第4艦隊の事故を解析して、各艦艇の改修も完了していた。それに対してアメリカ海軍は台風に関する知識に乏しいまま戦争に突入し、太平洋戦末期、勝ち誇るアメリカ艦隊は台風に痛撃されて想わぬ大損害を被った。

### フィリピン沖のハルゼー艦隊

1944年(昭和19)秋、レイテ沖海戦で日本艦隊を壊滅させた米国太平洋第3艦隊は、Halsey 提督の率いる空母20隻、戦艦8隻を中心とする大機動艦隊であった。12月中旬、ルソン島方面への航空攻撃で燃料を消費し尽くした第3艦隊の艦艇は、ルソン島東方洋上に一時退避して給油船団と会合して洋上補給を実施する事になり、会合点を指し針路東南東で航行していた。

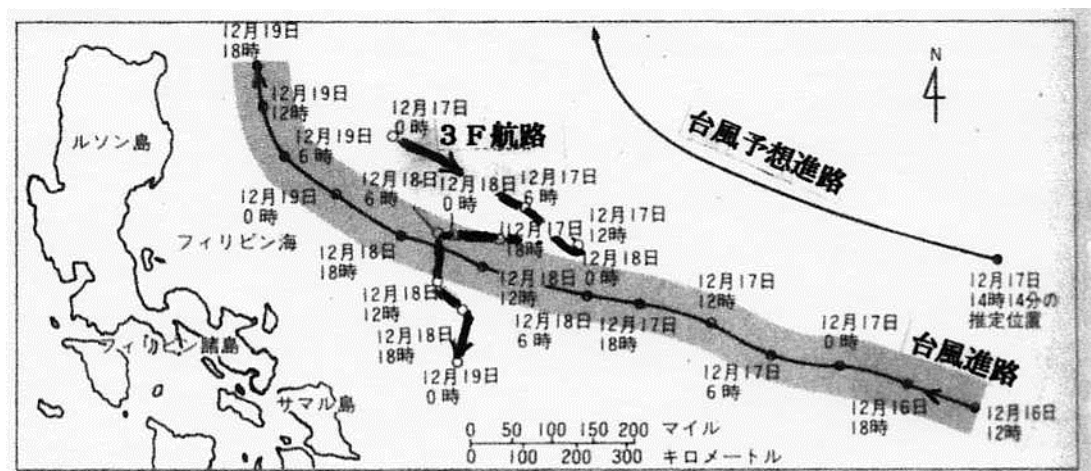
この頃、遙か東方に12月には稀な大型台風(台風コブラと命名)が発生し、西北西に進みつつあるのが察知された。第3艦隊の気象参謀は台風の予想進路を実際よりも東方面に想定し、それを避ける為に西方へ変針した後、更に南方に進路を決めた為に、12月18日午前から正午頃にかけて艦隊は台風と激突してしまった。(第65図)参照。

第3艦隊の大小100隻余の艦艇は散り散りとなり、各艦は必死の操船努力を重ねて、他艦との衝突回避や自艦の転覆防止に努めた。(この時の情景はHerman Woukの小説を映画化した「ケイン号の反乱」によく描写されている)

18日正午迄に“モナガン”“スペンス”“ハル”等の3隻の駆逐艦が転覆沈没し、他の大型艦も被害続出し、戦死者790名、更に空母からの航空機流失146機の大損害を受けた。この時の米第3艦隊は日本海軍航空隊の神風攻撃への対策として対空兵器を過剰に装備して、トップ・ヘビーの艦艇が多かった様である。

18日午前中の最高風速は64m/sec、最大波高は21mが観測された。

この想わぬ大失態でHalsey 提督は軍法会議にかけられそうになったが、アメリカ海軍の気象観測のシステムが弱体であったのが原因であろう。同じ艦隊が半年後に沖縄で再び台風



(第65図) 米第3艦隊と台風コブラの進路  
(半澤正男 「戦争と気象」より転載)

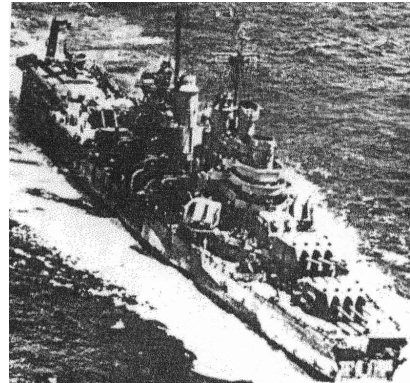
## 沖縄攻防戦での神風？

翌1945年（昭和20）4月、米・英連合軍は日本帝国に最後の痛打を与える為に沖縄に殺到し上陸作戦を開始した。この時の艦隊は前述の米第3艦隊（沖縄作戦では第5艦隊と称し、指揮官は Spurance 提督に替わっていた）を基幹に英艦隊も加わった戦艦18隻、空母40隻余、巡洋艦以下200隻、輸送船450隻等の史上空前の大艦隊で、沖縄海域に居座って地上作戦を援護した。（この大艦隊に対して、南部九州を基地とする日本陸海軍の航空部隊は、神風特別攻撃隊を連日の様に繰り出して邀撃し、かなりの損害を与えたが大勢を覆すには至らなかった。

6月5日に南方海面から沖縄方面へ台風（パイパー台風と命名）が接近しつつあるのが察知されたが、第5艦隊の気象参謀は再び予測を誤り、艦隊は台風と正面衝突となった。

この台風との闘いで重巡“Pittsburgh”以下3隻の重巡が大破、“Hornet”（二代目）以下3隻の空母に大損害、その他の艦艇26隻に被害が出た。航空機の破損流出は76機で、戦死者は7名であった。

先のフィリピン沖の事故に対すれば被害は比較的少なかったが、アメリカ海軍当局が衝撃を受けたのは、新鋭の重巡洋艦“Pittsburg”の艦首切断流失事故であった。日本海軍の第4艦隊事件に類似の事故であり原因も同じと思われるが、日本海軍の機密保持努力が効果を発揮したのか、アメリカ海軍は戦前の第4艦隊事件関連の情報は入手していなかった。



（第66図）“Pittsburg”艦首切断

フィリピン沖、沖縄沖と引続く失態を重く見た太平洋艦隊司令長官 Nimitz 提督は、翌年2月長文の訓令「台風の災厄からの教訓」を発して、台風への対策樹立を強く要望した。

筆者は1945年（昭和20）当時、小学校5年生で満州の大連に在住していたが、子供ながら不利な戦況を気にして、新聞を毎日読んで敵機撃墜のスコアを記録したりしていたが、当時の“大連日日新聞”の紙面で「神風遂に吹く、驕敵を痛撃」の様なタイトルで、台風により、敵の巡洋艦数隻が沖縄周辺海域で沈没した記事を読んだ記憶がある（誇大発表だが）、日本の中央気象庁は此の台風情報を予測して天気図にも記入していたそうだが、敵艦の被害に就いては無線傍受によるものかと思われる。なにしろ70年近く以前のこと故に確信は持てないが。

### （註7）台風に危険半円

北上する台風の右側海域は台風自身の渦巻く強風と台風の進行速度が重畳して風速が大となり危険。左側は両者が打ち消し合って可航半円と呼ばれる。

### （註8）台風の第4象限

危険半円の中でも右側後方領域で、最も風波が激しく、三角波の起こり易い海域。